パナマ共和国　　派遣期間　2013 年 4 月～ 2016 年 3 月

パナマ日本人学校　帰国報告

～世界一幸せな国！パナマ共和国！～

鹿追町立鹿追中学校
教　諭　髙嶋　幸太

１．パナマ共和国

パナマ共和国（首都パナマシティー）は北米大陸と南米大陸を結ぶ北海道よりやや小さい国である。太平洋と大西洋を結ぶ交通の要衝として古くから発達してきた。

人口約 387 万人、在留邦人は 334 人（2015 年 10 月現在）と言われている。公用語はスペイン語、英語は大きな病院やホテルでは話せる人がいる。

国のほぼ中央、国土がもっとも細くなった場所に太平洋側とカリブ海側をつなぐおよそ 80 キロのパナマ運河がある。気候は年中を通して温暖多湿で、5 月～ 12 月までの雨季と 1 月～ 4 月までの乾季がある。

２．パナマ日本人学校

平成 25 年度は在籍児童生徒数が 21 名、派遣教員数が校長含め 5 名であった。ここ数年の児童生徒数の減少は顕著で、平成 27 年度は在籍児童生徒数が 17 名となった。少人数であるがゆえに、学校の雰囲気はアットホームであり、全校児童生徒が仲良く生活している。

パナマ日本人学校はパナマの国際学校として認可されているため、スペイン語の授業が必須である。児童生徒は週 2 時間、現地講師からスペイン語を学んでいる。外国語活動の時間に加え英会話の授業を行うなどコミュニケーション能力の育成に努めている。

現地の学校と年 4 回の交流学習を行っており、けん玉・輪投げ・紙風船といった日本の文化に触れたり、現地校の友達と一緒に算数（数学）の問題を解き、教え合うなど、日本の教育を発信するよい機会にもなっている。

魅力ある学校作りの取り組みとして、基礎学力定着及び難問挑戦等での応用力アップを目的とした放課後学習会が定期的に開催され、長期休業中には苦手分野の克服及び自主学習意欲の向上を図ることを目的とした学習相談日を設定している。

３．教育実践記録（私の３年間）

～その１～

（１）小中連携を意識した英語教育研究の概要

パナマ日本人学校では、小学部１年生から中学部まで、英会話を週１時間（小学部５・６年生は英会話の他に外国語活動を週１時間）行っている。英語の歌や英単語絵カード取り等の「聞く」活動及び自己紹介やペアワーク等の「話す」活動を中心とした授業を展開している。これらの授業内容に加え、英語の歌詞を読んだり、カードに書かれた簡単な英語表現を書くことにより、英語に興味をもち、英語で表現できる児童生徒の育成につながると考え小中連携を意識した英語教育を行ってきた。

（２）研究実践

①英語を使用した授業実践

英会話及び外国語活動の授業では、外国人講師とのティームティーチングを基本とし、オールイングリッシュで行った。

②実践的コミュニケーション能力の育成

現地校との交流では、英語で日本の気候、自然、特産物などをバディ（現地校の友達）に紹介した。また、学習発表会では、パナマの動物紹介について英語で書いたものを暗記し、身振り手振りを用いて英語で表現した。

【学習発表会での英語発表】

（３）研究の成果と課題

①成果

・積極的に英語を使い、自ら話そうとする児童生徒が増えた。

・「もっと読みたい」「もっと書きたい」という学習意欲の向上が見られた。

②課題

・児童生徒数が少人数であることによる個に応じた指導方法の工夫と改善。

・英会話及び外国語活動担当者への引き継ぎ。

（４）研究の結果

「買い物に行ったときにお店の人の英語が理解できた」「現地校の友達に自分の英語が通じた」「英語の物語を自分で読むことができた」「自分の思いを英語で書くことができた」という児童生徒の感想から、「聞く」「話す」指導を中心としながら、「読む」「書く」指導も行い、４技能をバランス良く取り入れることにより、英語に興味をもち、英語で表現できる児童生徒の育成が可能になると考える。

～その２～

（１）思考力・判断力・表現力の育成を目的とした日記指導

派遣１年目、小学部３・４年生の担任となった。子どもたちと接している中で、語彙の少なさや作文指導を充実させる必要があると感じた。そこで、日記を始めることにした。

始めのうちは、「ただ何となく書いている」「こちらが書かせている」日記だった。「子どもたちは何を目的に日記を書いているのだろうか？」そう自分に問いかけてみた時、私の意識は変わった。

「ただなんとなく」から「自ら楽しんで」に子どもたちの意識も変わっていった。そして、私は子どもたちの日記を見るのが楽しくて仕方がなかった。

（２）『私はお母さん』

ある４年生の女の子が日記にこんなことを書いてきた。

「わたしがお母さんだったら、おいしいりょうりを作れるようになりたいし、さいほうとかピアノもできるようになりたいです。なぜなら、わたしのお母さんは、何でもとくいだからです。」

私は胸が熱くなった。お母さんの愛情をしっかりと受け止めて生活している様子が分かったからだ。

【小講堂で校歌を歌う子どもたち】

（３）育つ力

では、日記指導を通してどんな力が育つのか。それは、「何事にも継続して取り組む力」「思考力」「判断力」「表現力」「発想力」「文章構成力」「物事に対する意欲」「会話力」「自主性」「自律」「達成感」「満足感」…など、あげればきりがない。

しかし、何と言っても最大の効果は「言語力」が豊かになること。未来を担う子どもたちが、「生きる力」を身につけていく過程の中で、「言語力」はとても大きな武器となるのだ。

私が受けもったクラスの子どもたちは、日記を通して様々な言葉と出会い、言葉に助けられ、言葉を選んで、言葉で遊んでいたのだ。

そして、その多くの大切な言葉から、望ましい人間関係を構築し、助け合い、学び合い、切磋琢磨していった。

（３）継続するシステムを作る

では、具体的にどのように指導していくとクラス全員が喜んで書く日記指導が継続するのか。まずは、教師（担任）が子どもたちの日記を心から楽しんで読めることが一番大切である。そのためには、子どもたちにそれぞれの思いや願いや考えを、伸び伸びと書かせてあげることが大前提なのだ。

「子どもたちが楽しんで取り組む」→「伸び伸びとした表現」→「教師が読んで楽しむ」→「さらにやる気にさせる言葉かけ（コメント)」→「子どもたちが楽しんで取り組む」この何とも素敵な循環ができるのだ。

問題は、子どもたちが心から「楽しい！」と思うような日記を書くことだ。普通に考えると日記は「今日あったできごと」を書き、教師は「毎回コメントを書かなければならない」となる。これでは、お互いに作業となってしまう。

そこで、私は意図的に日記を書きたくなるようなシステムを作り上げた。それが、「全員集合日記」。これは、「内容は何でも良いからだしなさい！」という意味ではなく、「とにかくみんなが出せるように工夫したもの」だ。

その工夫とは、ネタを用意してあげること。例えば、「もしも１００万円もらったら」「自分に家族が増えたら」「〇〇さんへの感謝の気持ち」「私はお母さんだったら」…など、できるだけ子どもの実態に応じて、取り組みやすいお題を用意する。

そうすることで、子どもたちはどんどん書くようになる。これは、私の経験からだが、子どもたちの日記は翌日から変わる。そのポイントは、

・お題リストを作成し、子どもたちの日記帳へ貼り付ける。
・コメントは短く、なおかつやる気にさせるメッセージを書く。
・日記をクラスで紹介したり、交流したり、情報を共有できる環境をつくる。
・シールや賞など付加価値をつける。
・家庭学習の習慣化につなげる。

（４）言語活動の充実

日記は「言葉」。「どんな言葉を使おうか？」「何について書こうか？」とさまざまな角度から言葉について深く考える。日記を書くことで言語力が養われる。「作文の書けない子ども」が存在するのも現代の特徴。そこで、私はメモをとる習慣を身につけさせるためにも日記指導を行った。そこから、箇条書き→ノートへの適切な視写→作文へとつなげていきたいと考えたからだ。

【パナマ日本人学校】

日記を楽しむ子どもたちは、家庭学習の方法や普段のノートの取り方もより高度なものへと変化していく。また、日記は何といっても望ましい人間関係の構築には、もってこいのアイテム。友達の日記から得るもの、自分の日記が与えるもの、これらは、教師が教える表現技法の何倍もの効果がある。

日記を書くことで、自分自身の内面の変化はもちろん、家庭での会話も増え、荒れの兆しすら感じることはない。

日記は家庭と学校をつなぐ最高のアイテムなのだ。

～その３～

コスタリカ　サンホセ日本人学校との交流

１．はじめに

本校教育の充実と他の在外教育施設との交流をねらいとして、平成２６年度にサンホセ日本人学校へ視察研修の機会を与えていただいた。児童生徒数及び派遣教員数が本校と似たような教育環境における課題について、教職員間で交流をすることができた。視察研修後には、サンホセ日本人学校の教職員が本校へ視察研修で来校し、両校教職員間で交流を深めることができた。また、平成２７年度は私が担任する小学部３年生の児童４名とサンホセ日本人学校の小学部３・４年生の児童２名が、スカイプ（インターネット電話）で交流した。

２．活動記録

（1）サンホセ日本人学校での視察研修(平成２６年度)

平成２６年度のサンホセ日本人学校の児童生徒数は、小学部１年生１名、小学部３年生１名、小学部５・６年生４名、中学部４名の計１２名。時間割で特徴的だったことは、中学部１・２年生において、国語と社会はすべて複式となっており、数学と英語も一部複式を採用していた。

【サンホセの子どもたちによる迎える会】

視察日には、小学部６年生と中学部が、キャリア教育の一環として在コスタリカ日本国大使館へ職場訪問を行い、大使館の役割について理解を深めた。また、年間１０時間実施しているクラブ活動も参観することができた。茶摘みやハンカチ落としなどを楽しむ昔遊びクラブ、コスタリカの国旗カラーのビーズ作りに挑戦する家庭科クラブ、校舎外の廃材を利用し物づくりに挑戦するアートクラブと、どのクラブも児童生徒の興味・関心のある分野を追究させることを通して、技能の習得や個性の伸長が図られていた。

授業参観後には教育懇談会が行われ、パナマ・サンホセ両校の複式授業における課題や教育実践報告、児童生徒の実態等について交流することができた。

（2）サンホセ日本人学校との交流（平成２７年度）

①交流計画

サンホセ日本人学校と交流を進めるにあたり、年間指導計画を作成した。概要は以下の通りである。

月	項　目	内　容
６月	年間指導交流計画案の調整	パナマ日本人学校小学部３年生４名とサンホセ日本人学校小学部３・４年生２名との年間指導交流計画案について、両担任間で調整。
７月～８月	交流内容の準備	９月～１１月の交流内容についての事前準備。

９月	自己紹介	両校の交流対象児童が、顔写真つきの自己紹介文（レターサイズ１枚片面）を書き、ＰＤＦでメールに添付し送付。両校の校内掲示板に、お互いの交流の取組がわかるように交流コーナーを設置。
１０月	日本人学校のよさを伝える	本校の施設や学校行事に関わる写真に説明を加えた資料、教室掲示や児童生徒作品、スピーチ集会の原稿など、パナマ日本人学校のよさが伝わる取組について、ＰＤＦでメールに添付し送付。
１１月	スカイプでの交流	お互いの学校のよいところと特色について、クイズを交えながら模造紙にまとめ、交流コーナー（掲示板）に掲示。まとめ資料の発表交流は、スカイプ（インターネット電話）で行った。

②交流の実際

９月　自己紹介交流では、好きな教科・好きな学校行事・好きな本・好きな遊びなどを紹介。

１０月　校舎、プール、水泳大会、写生会の絵など、特色ある教育活動を含めた本校のよさを紹介。

１１月　サンホセ日本人学校の資料からわかったことをまとめ、質問事項を整理し、スカイプで発表交流。

３．成果と課題

（１）成果

①サンホセ日本人学校の教育実践について知ることができた。

②お互いの学校のよさについて、理由をつけて説明することができた。

③短い文章で相手にわかりやすく伝えるためには、どう表現したらよいかを考えることができた。

（２）課題

①交流学年の実態に合った交流学習計画の作成。

②スカイプで交流する場合、タブレット端末等の整備と管理。

４．本校児童の感想

○スカイプでサンホセ日本人学校と交流をして、本当に行ってみたいと思いました。勉強やスポーツを一緒にやってみたいです。また、機会があれば交流したいです。

○サンホセ日本人学校とスカイプをして、同じ所やちがう所がたくさんあることがわかりました。たとえば、一輪車をみんなで練習しているところです。また、スカイプで交流をして、もっと仲良くなりたいです。

○サンホセ日本人学校と楽しくスカイプで交流をすることができました。サンホセ日本人学校は、コーヒーを作っているので、わたしもコーヒーを作って飲んでみたいと思いました。

○サンホセ日本人学校とスカイプで交流をすることができました。相手の顔を見て交流ができたので、とても楽しかったです。サンホセ日本人学校には、強そうな見張り犬がいて、安心できる学校だと思いました。

５．おわりに

サンホセ日本人学校との交流を通して、児童が「海外の日本人学校のことを知ることができた。」「パナマ日本人学校とサンホセ日本人学校のそれぞれのよさがわかった。」「サンホセ日本人学校に行ってみたい。」という感想をもつことができた。お互いの自己紹介に始まり、スカイプでの交流まで、児童にとって興味・関心のある題材で交流を行うことができた。

本校児童の感想から、今回の交流はパナマ日本人学校とサンホセ日本人学校の架け橋となる交流であったと思う。今後も、本校の児童生徒と他の在外教育施設の児童生徒が、ともに学び合う交流学習が継続されていくことを期待している。

４．世界で最も幸せなパナマ共和国

「世界一幸せな国はどこかわかりますか？実はパナマ共和国なのです。」在パナマ特命全権大使のお言葉だった。

アメリカのコンサルティング会社 Gallup の行った調査によると、日常生活における「目的面」「社会面」「経済面」「コミュニティ面」「健康面」といった５項目において堂々世界ランク１位に輝いた。

ラテン系が多いパナマ人は陽気な性格で、年中行事やカーニバルも華やか。休日は家族や友人と過ごす傾向がありコミュニケーションを大切にし、助け合いの精神をもっている。例え経済的に裕福とは言えなくとも、心の距離が近く、地元愛が深いライフスタイルに満足する者も多い。

また、赤道に近いため、一年中気温が高いパナマ共和国。緑が生い茂る熱帯雨林、青く美しいビーチや島々がたくさん存在する。その自然の美しさに人々の心も洗われるようだ。

先住民が今も快適に暮らせている土地というのは、やはり人と人を大切にする文化が根付いているからだ。東部に住むエンベラ族は伝統的な音楽やダンスを守り、国とその文化を支え、観光業を盛り上げる重要な役割を担っている。

どのような要素から幸福を感じ取るかは人それぞれだ。

しかし、豊富な資源と、快適な人間関係を持つコミュニティの存在は、幸福度 No.1 を収めるための大事な要因だろう。

パナマ共和国は北米と南米、また太平洋と大西洋を繋ぐ重要な位置づけにあり、今後の発展にも注目される重要な国に違いない。

【高層ビルが立ち並ぶパナマシティ】

最後に、私が家族とともに過ごしたパナマ共和国での様子を画像で紹介する。

【教室風景】重い机なのです

【スーパーのレジ】チップが必要

【ゲームセンター】世界共通

【土産店】伝統刺繍モラ

【乗り合いバス】別名：赤い悪魔

【移動式バーガー屋】安くてうまい！

【piopio】３年間通った KFC もどき

【寿司】何でもいれちゃうロール寿司

【ビーチ】オールインクルーシブ

【クナ族①】児童は船で登下校

【クナ族②】あまり物がない教室

【クナ族③】校長夫妻（中央）と

３年間、パナマでの日々を健康かつ大変有意義に過ごすことができた。私に多くの「気づき」を与えてくれた、日本人学校での上司、同僚、保護者、日本人会、そして子どもたちに感謝の気持ちを伝えたい。この貴重な経験を将来を担う北海道の子どもたちに還元していきたい。